寺田寅彦論

—世界観と方法の更新—

大嶋直美

寺田寅彦（明治 11 年-昭和 10 年）は物理学者であり、夏目漱石の門弟の一人として知られる随筆家でもある。文学活動としては明治期に『ホトトギス』に発表した小説に近い短編、大正 2 年から 8 年にかけて自身の科学観が集中的に論じられた「科学論の時期」のもの、大正 8 年から昭和 10 年に亡くなるまでの主に「科学随筆」と呼ばれる作品の三つに大別できる。

従来の文学研究における寅彦論は、より「文学作品らしい」明治期の短編を中心に蓄積されてきた。一方大正期以降の科学随筆は、寅彦の本業が物理学であることに加え科学的な事柄を題材とするがゆえに分野の壁が意識され、文学の立場からは十分に取り上げられてこなかったと考えられる。しかし寅彦自身は昭和 8 年の作品『科学と文学』において、「科学者が、科学者としての自己を欺瞞することなくして「創作」しうるために取るべき唯一の文学形式は随筆」であると述べる。すなわち大正期以降の随筆は、寅彦が科学者として文学に向き合うために選び取った形式であったにもかかわらず、中期の「科学論」を経て寅彦が何を意図して文学としての随筆を書いたのかという点が充分に検討されていない。その結果大正期以降の作品は、寅彦が目指した「科学者の文学」としては未だ充分に評価されていないのではないか。

本発表ではこの課題に対し次の仮説を立てる。大正 8 年以降の寅彦を「科学随筆」の執筆に向かわせた理由が、大正 2〜8 年の「科学論」を分析することで明らかにできるのではないか。そして以上により判明する彼の科学観は、同時期以降の文学観や作品の方法の変化にも影響しているのではないか。この仮説が成り立つならば、「科学随筆」と呼ばれてきた大正・昭和期の作品は、単に科学を題材とした文章ではなく独自の価値をもつ文学作品として位置づけ直すことができる。

調査は次の順序で進める。まず「「科学論」の時期」の作品から寅彦本人の科学観を整理し、それが同時代の科学の動向をどのように受け止めたものであったかを確認する。次に、その科学観が文学観の形成にどのように関わったかを検討する。さらに明治期と大正期以降の作品について、追憶を題材とするものや短文を連ねて構成されるものを取り上げ、方法の違いを比較する。最後に以上を踏まえて大正期以降の代表作である『備忘録』を分析し、科学観と文学観が作品内でどのように表現されているかを考察する。

本発表では、大正期の科学論に見られる統計力学的法則観と不可逆な時間意識が「記録」を重視する文学観として結実し、追憶の描写や短文の配列といった方法の更新として表れていることを示す。この作業を通じて寅彦の大正期以降の作品を、科学と文学を横断する独自の世界観の実践として文学研究の立場から評価することを目指す。